



曼荼羅、宝塔等から見る

御召服講の由来

本日の講演のまとめ

	江戸期	明治維新以降
講の性格	題目講	題目講 御召服講(夏・冬)
現在の冬御召服講	武相講中(15ヶ村) 曼荼羅 寛政5年(1793) 谷口宝塔 文化9年(1812)	曼荼羅 明治2年(1869) (永代御召服施主)
現在の夏御召服講	六ヶ村講中(6ヶ村) 柿生宝塔 寛政11年(1799) 金井宝塔 弘化 4年(1847) 曼荼羅 安政 3年(1856) 6ヶ村とは(麻生、片平、能ヶ谷、三輪、 金井、奈良)	法衣一式(葵の家紋入り七条袷裳) 曼荼羅 昭和47年(1972) (100周年記念 法衣生地使用)

六ヶ村題目講・十五ヶ村題目講の 始まり

- 六ヶ村講最古の宝塔
柿生宝塔 寛政11年(1799)建立
- 十五ヶ村講最古の曼荼羅
寛政5年(1793)染筆
- これら2つから、両講は少なくとも220年を超える
伝統を持つことになる。

柿生宝塔寛政11年(1799) 全景



柿生宝塔寛政11年(1799)



柿生宝塔寛政11年(1799)

建立年

最古の宝塔



柿生宝塔基壇寛政11年(1799) 六ヶ村名



金井七面の森宝塔弘化4年(1847) 全景



金井七面の森宝塔弘化4年(1847)



金井七面の森宝塔弘化4年(1847) 建立年



金井七面の森宝塔弘化4年(1847)
六ヶ村名



金井村
奈良村
能谷村
片平村
麻生村
三輪村

右六ヶ村
信者中

夏御召服講曼荼羅掛軸
安政3年(1856)



夏御召服講曼荼羅安政3年(1856)

脇書拡大

六ヶ村題目講中者也

授受
御花
奉納

長年の御花奉納という講の功勞を賞して、下賜されたもので、池上本門寺への具体的な参加の仕方は、寺の法会にあたって仏前に花を供えることであって、参詣講的な性格を持ち合わせたと考えられる。

安政三年丙辰年二月吉祥日

冬御召服講曼荼羅掛軸
寛政5年(1793)



冬御召服講曼荼羅 寛政5年(1793)



冬御召服講曼荼羅寛政5年(1793) 脇書拡大



最古の曼荼羅



谷口宝塔文化9年(1812)

全景



谷口宝塔文化9年(1812)



谷口宝塔文化9年(1812) 建立年



六ヶ村題目講・十五ヶ村題目講の 性格・特徴

- 中尾教授によれば
- 寺院仏教が江戸幕府の宗教政策、檀徒制度政策により葬祭仏教として規定され、寺檀関係が葬祭を基本的な要素として持つ
のに対し
- 両講は、庶民(農民)が作り上げた独自の宗教世界であった。

このことは、以下の事実に現れる。

- 講員は池上本門寺を本寺とする寺院の檀徒とは限らず、題目講の形成に檀那寺の本末関係が影響を与えているとは考えられない。
- 講の宗教儀礼に僧侶が関与しない。
- 披露題目も、寺院を使用せず、講員宅で行われてきた。

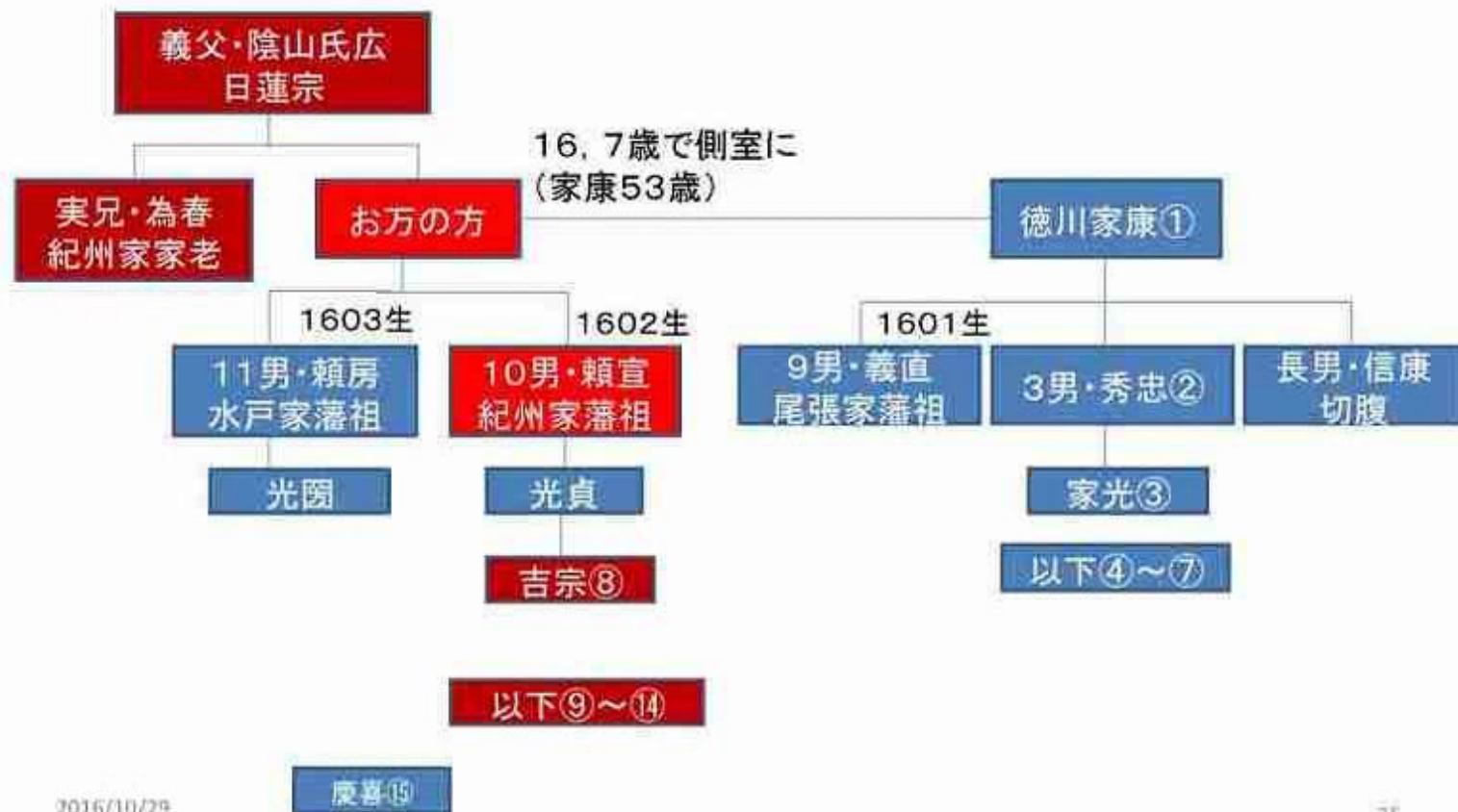
経済力を有する安定した講集団

- 両講は、江戸期から明治、大正、昭和にかけ、池上本門寺等に多くの寄進を続けている。
両講が所蔵する約40本の曼荼羅の大部分が、この寄進に際し、下賜されたもの。
- 養蚕・生糸産業、禅寺丸柿の出荷などを背景に、当時の農村としては、なみなみならぬ経済力を有していたと考えられる。

江戸期(明治維新まで)の 御召服の奉納

- 江戸期(明治維新・廃藩置県まで)の池上本門寺日蓮聖人の御召物は、紀州徳川家が奉納していた。
- これは、徳川家康の側室お万の方の日蓮宗への帰依に由来する。

お万の方・紀州徳川家と日蓮宗の関係



お万の方・養珠院とは

- 16, 7歳のころ、家康の側室に
- 代々日蓮宗を信仰していた義父の影響で日蓮宗に帰依。
- 紀州家、水戸家藩祖の生母 8代吉宗の曾祖母。
- 身延22世日遠の駿府法難を身を賭して救う。
- 1653年(4代家綱の代)没 池上本門寺紀州徳川家墓所に供養塔。
- 本門寺の寺運興隆・発展は、お万の方の尽力が大きい。

御召服の奉納が、紀州徳川家から 六ヶ村講・十五ヶ村講に

- 明治維新により、紀州徳川家は、奉納の継続が困難になり、
- ①熱心な信仰心を持ち、
- ②強い結束力を持ち、安定した講集団を形成しており、
- ③それらが、なみなみならぬ経済力で担保されていた両講に全幅の信頼と継続への期待を持って依頼された。

明治2年に夏御召服の奉納の役を受けてきた方々 昭和47年頃 小島才助氏談

- 能ヶ谷村
神蔵岡右衛門、神蔵嘉工門 (能ヶ谷蓮清寺の檀家)
- 三輪村
△矢沢竜之助、△碓井文左工門 (三輪妙福寺の檀家)
- 金井村
草薙薙太郎、草薙鶴吉、秋本要吉 (谷口青柳寺の檀家)
- 片平村
高木平七、小島喜平治 (片平善正寺の檀家)
- 麻生村
小島源左衛門、△鈴木七右衛門、鈴木八右衛門、小島定治、
小沢吉衛門 (三輪妙福寺の檀家)
- 奈良村
関根 某 (奈良盛円寺の檀家)

△印の方が、代表者として、池上本門寺との折衝にあたった。

紀州徳川家下賜の法衣一式

昭和63年撮影



裳



七条袈裟



絡子

裳着用

昭和63年撮影



夏御召服講所蔵曼荼羅掛軸

昭和47年(1972)御召服奉納100周年記念



法衣の一部は、100周年時に下賜された曼荼羅の表装に使用され、現在は、葵の紋つきの掛軸として所蔵・保存されている。

葵の紋、七条袷裳部分の拡大



冬御召服講所蔵曼荼羅掛軸
明治2年(1869)



冬御召服講所蔵曼荼羅 明治2年(1869)



冬御召服講所蔵曼荼羅 明治2年(1869)脇書拡大

武相講中一結為各信力堅固一切無障礙授與焉

當山大堂 祖師冬御服一重御裳頭一枚永代施主

日蓮聖人の木像に着せる「御服」一重、頭を包む布一枚を永代にわたって寄進する武相講の講員すべてが、強い信仰心を持ちその力によって一切のさわりがないように、の意

明治二載 在己己冬十一月

御召服講の行事

- 御召服の仕立(夏は麻衣、冬は絹衣)
- 披露大題目の開催(奉納の1週間～10日前)
 - 御召服の披露
 - 御経拝読
- 御召服の奉納
 - 夏御召服の奉納
 - 4月28日(建長5年(1253)の日蓮宗立教開宗の日)
 - 冬御召服の奉納
 - 10月12日(弘安5年(1282)に日蓮が池上の地で入滅した日の前日)
- 本門寺御札・供物分配、役員会(奉納の1週間～10日後)

1年交替の当番講

御召服奉納

- 池上駅発 講旗、御召服、講長、太鼓、講員の順で本門寺塔頭の中道院に向かう。
 - 中道院にて御経拝読(導師本門寺役僧)
 - 中道院発 本門寺に向かう。
 - 本堂にて御召服奉納(着換)、焼香、貫主より御礼・講話
 - 御下げ渡しの御召服、御札、供物の授受
 - 昼食、中道院での打合せ、休憩後解散
- 昔は、2泊(中道院)3日、徒歩、多摩川は渡し舟

お会式ポスター



題目講として約300年の伝統 御召服講としては、まもなく150年

- 信頼と継続への期待を受け、引継いで以来150年にわたり、御召服の奉納を継続
- 講員が思う以上に他の檀信徒から羨望視されている。

六ヶ村講の変遷

- 寛政11年(1799) 柿生宝塔建立時
6ヶ村(麻生、片平、能ヶ谷、三輪、金井、奈良)
- 平成11年(1999) 奈良離脱時
5ヶ村(麻生、片平、能ヶ谷、三輪、金井)
- 平成22年(2010) 金井離脱時
4ヶ村(麻生、片平、能ヶ谷、三輪)

注;夏御召服講規約上は、奈良、金井は休講扱い